

# コタンメール

第4号 2002. 9. 10発行



2002夏休み絵画コンクール

## 「コタンを描こう」入賞者決まる

8月17日(土)、体験学習館で表彰式が行われました。今年の応募数は48点で、みんな力作ぞろいで、賞を選ぶのがたいへんでした。



### ■ 親子で楽しむアイヌ工芸教室 ■



今年の工芸教室は8組の親子が参加し、8月10日(土)は貝げたとコマを、11日(日)は鹿笛と弓矢を作りました。

見るに見かねてお父さんが手を出す組、子どもの方が上手に出来上がる組とさまざまでしたが、最後はみんな完成して、さっそく使って遊んでいました。

おもちゃなど簡単に買ってもらえなかった昔の子どもは、自分でおもちゃを作って遊んだものです。今度は家で、新しいおもちゃづくりに挑戦してほしいと願っています。

### ■ 絵画コンクール入賞者

幼児の部	コンカニ賞	かわむら かれん	さくら幼稚園
	シロカニ賞	さとう えいた	緑丘保育園
	コタンコクワ賞	しみず かずき	
	ピリカ賞	おみ あかり	
		そとざき さやか	
		さいとう かずや	
		だざい ゆうさく	
かみかわ あや			
小学校低学年の部	コンカニ賞	まつばら みやび	緑丘小3年
	シロカニ賞	ほんま かなえ	虎杖小3年
	コタンコクワ賞	ほんま しょうた	虎杖小1年
	ピリカ賞	やままるけんゆう	白老小3年
		かわむら かすみ	白老小3年
		とき えり	緑丘小3年
		さいとう なつみ	日新小3年
はれまき あやか			
高学年	コタンコクワ賞	いのうえ はるか	萩野小6年
	ピリカ賞	つるた ゆうき	日新小5年

### ■ 東京から調べに来ました ■

8月の初め大雨の日でした。館長がお客さんに展示の説明をしている時、ずっとついてきて、後で熱心にメモをしている女子小学生がいました。特別展示室の前で、その子が質問してきました。「イクパスイって何ですか」。

東京都北区から来た萩原絹恵さん、小学4年生でした。夏休みの自由研究でアイヌを調べているのだそうです。「ずいぶん勉強になりました。ありがとうございました」と雨のなかを戻って行きました。絹恵さんありがとう。



# 人間らしい暮らしができる21世紀を

## イオル構想とアイヌ民族博物館

イオル（イオロと発音する場合があります）とはアイヌ語で生活を保つ場所という意味です。

今、国の事業でイオル再生計画が始まり、白老町を中心にして、北海道の7カ所にイオルを再生しようということになりました。

この考え方のもとになっているのは、

- 1 今ある昔から伝えられたアイヌ文化を将来に残すためにもっと力を入れていこう。
- 2 アイヌ文化は背景にある自然の恵みなしには成り立たないものだから、昔のままの自然を取り戻そう。

というものでした。

白老町では、以前からアイヌ民族博物館を軸に、アイヌ語、文化財、芸能、工芸、記録、食利用や資材の源になる自然等、昔の文化を物語る多くの物や事柄の保存と伝承に努めて来ましたので、特に、この構想の中核になれといわれ今具体的な計画を練っている最中です。

一番基本になるのは、やはり自然です。そして、私たちと自然との関係をどう考えるかということです。自然と自然観が文化の個性を生み出しているのです。

アイヌ文化は衣服や生活用具を形だけで考えてもわからないでしょう。どうしてクマ送りをしなけれ

ばならないのか。どうして東の窓からのぞいてはいけないのか。どうしてウバユリの根を根こそぎ取らないのかなど、昔のアイヌの子どもたちがそうしたように、自然の中に入りこんで考える必要があります。

だから、あまり開発されずに昔の自然が身近に残っていて、資料収集や研究や教育活動が長年にわたって続けられているアイヌ民族博物館のある白老が中心になって、アイヌ民族全体の文化の再生を進めなさいということになりました。

誰もそうとは考えないでしょうが、イオルの再生はアイヌ民族が昔の生活に戻るということではありません。

20世紀の文明が生み出した人類生存の危機をどうやって乗り越えていくのかが、私たちの問題ですが、イオルの再生はその一つの解答だと思われま。私たちが人間らしく生きていくための知恵を、昔のアイヌ文化から学ぼうというのが、大きな目的である。そしてそのことは、アイヌ民族博物館がめざしてきた目的であり使命であったことを、わかっていたかいたいと思います。



### 10月の文化教室

## アイヌの食文化

アイヌの伝統的な調理方法を紹介します。

10月12日(土) 17:30~

講師 黒川セツさん(平取町在住)

木村イトさん(平取町在住)

村木美幸(学芸員)

場所 体験学習館

申込み 82-4199(学芸課直通)

### ■編集者の言葉



私の教えている大学生に言われました。「この前白老の先生の博物館へ行きましたが、国道の看板が貧弱です。あれでは、あそこに博物館があることをだれも気づきませんよ。」

授業では、博物館に人を呼び込む重要な手段として、道標や看板の大切さを教えているが、実際、どこの博物館も看板が貧弱で探すのに苦労をする。車の速さでアイヌ民族博物館が見つかるかどうか、毎日意識して白老周辺を走っているが、私もまだ博物館に辿り着けないでいる。(中村 齋)